

日本の歴史 32

『日本語雑記帳』

田中章夫著 (岩波書店 岩波新書 2012)

本書の請求記号 810.44Tan

稲垣 宏行

言葉は時代の流れと共に変わっています。2010年には常用漢字が1945字から2136字に増えましたが、メールの絵文字やインターネットのスラングのような新語が近年巷に溢れていることも見逃せない現象です。しかし、言葉の歴史とその進化の様子からも、我々の知らなかった興味深い事例が多く見られると思います。

言語学の教授だった著者は、明治期から現代にかけての日本語について研究し、その変遷と実態を詳細に描いています。

「おとうさん・おかあさん」という呼称が使われ始めたのは、明治36(1903)年発行の国定教科書に登場した事がきっかけだと言われていますが、著者は山の手で主に使われていた「おとうさま・おかあさま」から変化したものが始まりと見えています。ただ、東日本の大部分では「おとつあん・おっかさん」がまだ主流で、特に東京の下町でその傾向が顕著にあることも著者は指摘しています。

方言において、同じ地方でも若干の差異があることも指摘しています。例えば「来ない」という言葉は、京都では「きいひん」、大阪では「こおへん」、神戸より西では「けえへん」と、同じ近畿圏でも違いが見られます。東京でも、山の手では「こやしない」、下町では「きやしない」という違いがあります。しかし「きやしない」の方が標準語に近いと考えられるようになったことから山の手でも主流になったという事例も確認できます。

漢字の読み方についての記述も興味深いもの

があります。日本語には「口腔(こうくう、こうこう)」「分泌(ぶんぴ、ぶんぴつ)」のように、読み方が二通りあるものが存在します。しかしそれだけではなく、第二次大戦中は「遵守(そんしゅ)」「遂行(ついこう)」「大尉(だいい)」など、現代とは異なる読み方が存在していたことも本書で取りあげられています。

著者は日本人と電話との関わりについても触れています。日本に電話が初めて登場したのは明治23(1890)年頃と言われています。ところが、なかなか普及しなかったようで、昭和に入っても、日本軍兵士で数十人中2、3人しか電話を使ったことがないという話が本書で挙げられています。戦後に入っても地方出身者は電話を使いこなせず、そのため次々に都会の会社を辞めて行ったという事例もあったようです。日本人が電話に興味を持ち始めたのは昭和50(1975)年以降からだと言いますが、誰もが携帯電話を持ち歩いている今日と比べると隔世の感があります。

日本語は奥深いものです。いま取りあげたものはその一部に過ぎず、まだ知られざるエピソードが本書では多数紹介されています。ただし、それも明治期以降に焦点を当てたもので、全てではありません。現在でも、日本語の起源には未解明の部分が存在します。本書の一読をきっかけに、日本語の歴史と変化についてより詳しく調べていけば、さらに驚くべき事実の発見が期待できると考えます。

いながき ひろゆき(司書・情報サービス課)